

リーグル著『オリエント古絨毯』（八 完）

細井雄介

Riegl's *Altorientalische Teppiche* (continued)

Altorientalische Teppiche (1891) is the first book of the art historian Alois Riegl (1858–1905) and highly significant in the development of his whole activities. Furthermore, it is regarded as the starting point of theoretically exact studies in Teppich in general. So, in the former issue (Vol. 123, July 2014) of this periodical, I introduced the Vorwort and Einleitung of the book with a chronological survey of Teppich-studies in the 1970s. Then, in the next issues (Vol. 126, December 2015) the first chapter, Der gewirkte Teppich, (Vol. 127, June 2016 ; Vol. 128, January 2017) the second chapter, Der Knüpfteppich, (Vol. 129, June 2017) the third chapter, Susandschird, and (Vol. 130, January 2018 ; Vol. 131, June 2018) the fourth chapter, Der Knüpfteppich im Verhältnis zur altorientalischen Kunst.

Now, with great respect for the content of the book, I continue my same work on the chapter V. Der Knüpfteppich im Abendlande. As before, in order not to miss any detail I have translated the whole of this chapter into Japanese here. With this chapter I complete my work of translation.

The original text is as follows:

Alois Riegl, Der Knüpfteppich im Abendlande. in: *Altorientalische Teppiche*.
Mäander Kunstverlag 1979 (Nachdruck der Ausgabe 1891). S. 172–214.

本稿の目的は後段に置く論考の翻訳紹介にある。芸術研究と歴史との関連を思い、美術史家リーゲル (Alois Riegl, 1858-1905) の洞察を重んじて著書『オリエント古絨毯』の理解に努めてきた。ここに最終章を訳出して作業全体の終結である。

酷暑に災害の半歳であったが、土用に連続四日三晩の梅干しができた。降雨の懸念なしには東京の空では十何年振りのことで、自然との諧和を汗まみれに教えられる。仕込んだ梅に紫蘇を入れてカビは出ないかと恐れるころ本論叢の先集が届く。附載論考『郷民芸術・家内仕事・家内工業』が纏まり、あらためて主旨を梅干し作業と思わせる日々にもなった。

「家内仕事 (Hausarbeit, Fleiß 刻苦・精励・心身傾注)」の語は工芸の文献では周知の用語であったらしいが、家庭内で必要が生じれば家内総出で当の必要事を果す営みのことであり、この全身的作业が手に集約されると「手仕事 (Handwerk)」になる。こうした作業による「ものづくり (Production)」の賜物が「技芸 (Kunst)」の品々であり、血縁地縁の濃い狭い範囲内にある家庭同士の群を「郷民 (Volk)」の語で纏めると、「家内仕事」の成果として「郷民芸術 (Volkskunst 民衆芸術・民族芸術・民芸)」が立現れる。この原始的な人類最初の家政経営の仕組みを繰返し強調したのがリーゲルであり、当の小冊子公刊年一八九四年とは日清戦争のとき、明治二十七年である。近代わが国の新たな術語としてよい『民芸』は、この「郷民芸術」とほぼ等置できるのであろうか。

注意すべきは家内仕事・手仕事と「家内工業 (Hausindustrie)」との決定的相違である。「家内工業」とは原初の段階を越えた第二の経営体制のことであり、営利を顧慮しなければならぬゆえに「家内仕事」の「ものづくり」に大方は劣化となる質的变化をもたらすのである。

丹精込めた梅干は熟成の月日を経て壺から取出される。絶品と讃えられる幾粒かは世に出るでもあろう。だが極

くわずかな贈答は生じて、あくまで自家消費の品であり、商品ではなく狭い郷内を越えての流通は生じない。梅干に社会や世界はなく、したがって歴史もない。その時その時に尚ばれ、しばし口中を楽しませ、やがて腹中で消えゆくばかりである。

わが国の『民芸』を「郷民芸術」と同列上に捉えてよいのであれば、リーグルの所論は、これを「民芸梅干論」と呼んで鮮かに印象深く立論の可否や意義を問うことができよう。

リーグルの処女作『オリエント古絨毯』の実証的な分析記述の連続を支えていた洞察は、右のごとく表裏を成す郷民芸術Ⅱ家内仕事の原理論であった。

本題『オリエント古絨毯』最終章の論述は侘しい。

ペルシア絨毯の語が直ちに思わせるのは、わくわくする「魔法の絨毯」の空翔る姿である。しかし今は失せて見ることも叶わぬ真の姿を追って、この豪勢な奢侈絨毯が、実は特殊な統治機構のもとで瞬時とも言える短い時期に生じた奇形児でしかなく、絨毯そのものは「添毛手結び」なる最も素朴で簡単な「手仕事」の作物を越え出るものでないことを、リーグルは疑いの余地ないほどに明示した。

だが作り方は簡単で、絨毯は欲しいとあらば、どうして西洋は自前の絨毯を作らなかったのか。この疑問への対処が最終章前半部分にあたり、スカンディナヴィア半島、バルカン諸地方およびポーランドの三地带が語られる。

中央ヨーロッパの近代史を描いたオーキーの部厚い概説書『ハプスブルク君主国』（邦訳 NTT出版 二〇一〇年。Robin Okey, *The Habsburg Monarchy c. 1765-1918*, 2001）を開けば、神聖ローマ帝国を引継いで多民族を抱えた大版図の国家が近代へと歩む筋道で、産業を語る章節ではもとより織物工業の興隆も述べられる。しかし手織りの絨毯が特

記される余地はどこにもない。工業として扱える代物でないのである。

リーゲルにとつても大版図内における各地土着の日用絨毯制作の有無については語りようがない。たちまち檻樓と化す消耗品には確証となる資料がないからである。絨毯として西洋が憧れるのはやはりオリエントの豪華な添毛手結び絨毯であつて、往昔の国営工場は消滅したにせよ後裔として各地に永らえる工場経営のなかに奢侈絨毯制作の技術は保たれていて、移植に努めるならば当の技術が狙いの的になる。まずスカンディナヴィアではどうか。ここに添毛手結び変種の存立を認めることができたものの、これは、遠く離れた地にあつてオリエントとは無縁の土着自生の姿としなければなるまい。つづいてオスマン＝トルコに隣接して深く関るバルカン諸地方に向うが成果はなく、最後が特異な物語を伝えるポーランドの検討である。やや長い論述では当地「一九九一年以降はベラルーシ」に工場経営の方制でオリエント絨毯技術を移植した時期があつたにせよ、期間は短くて、いまはすでに諸記録書類までも完全に消失したことを見届けている。望んでも西洋では「添毛手結び」を工場方制で存続させることが「できなかった」事実の確認でもある。

「できなかった」理由の根柢には、簡単ながら途方もない時間を要する手仕事の担い手の有無という社会学的事実がある、とリーゲルは明言する。そして世界全体の近代化への歩みは、当の担い手を蔵している遊牧民の生活をも変えるであらうと予見する。添毛手結び絨毯への憧憬に、好事家の骨董的価値への愛好も潜むのであれば、古絨毯を輝かせている「色」と「模様」については、新たな機械式近代織機で織布にこれらを模写して楽しむがよい。だが本来のオリエント絨毯には、手織機の墓に納まる時がきた。この挽歌が本書の結尾である。

優れた床敷きの畳で育った身に絨毯はどこか異国の民具という気配がいつまでも残る。わが国で絨毯が全国的に

普及したのは、敗戦後の団地など集合住宅の造成で少くとも一室は板の間にしてからのこと、などと聞えるが、こうして住生活の必需品となった絨毯は当然ながら大量生産の機械製品であって、オリエントに出た本来の絨毯とは異質の床敷きとしてよい。

それゆえに古来西洋が珍重してきた絨毯とは何か、と問われると、タピスリとタピの相違も定かならず戸惑いを覚えるのでないか。手引書を探せば、本考の「文献案内」（本論叢第二百二十三集）が語るように今日の参考文献は膨大な数となり、いずれも専門的特殊研究の体を成すからには頼っても絨毯の大観や実感が得られるものでない。この点で絨毯研究の出発点に立つリーグルの本考は、絨毯理解にとつての最も手堅い入門書と捉えてもよい。「平織り」としてであれ「添毛手結び」としてであれ家庭内で作られて完全自足のまま消えていた絨毯は、西洋から必需品として求められることにより家庭の外に出て、社会を知り、社会のなかで歴史を味わうことにもなった。この歴史を宏大な世界史の展望のもとで簡潔に綴ったのがリーグルであり、世界史におけるオリエント絨毯の位置については、リーグルを思いつつ、やや自信を以て語れるようになるであらう。

リーグルの対象記述における世界史的展望の視界の大きさはよく語られる特質であるが、学歴譜を読むと、素養の背後にランケの門に出た普遍史（*Universalgeschichte* 万国史）家ビューディングガー（*Max Bidingger* 1828-1902）の名が浮ぶ。この師との関りではリーグル自身の捧げた慶祝論文「芸術史と普遍史」（リーグル著『ヴァフィオの杯』中央公論美術出版 所収）もあり、知られている名であるとしてよい。

他方、宏大な視界内で見据えられる個物の特性記述は、これもまたリーグルの遺した全論考に共通する冷静な説得力で際立つ。学生時はウィーン大学附置「歴史研究所」所員として古文書解読に励み、就職先「オーストリア博物館」では織布部門での実地調査と即物的吟味の日々である。こうした修練が独得の文章力をおのずと鍛えたので

あろう。だがこれだけでは説明し切れないとすれば、記述すべき対象を見る眼を支える哲学的姿勢が問題となる。このとき浮ぶのがブレンターノ (Franz Brentano, 1838-1917) の姿である。リーゲルが学生時ブレンターノに学んだ事実は伝記が述べている。だが実質が何であったかは一向に明かでない。残念である、ここでは記して置くに止めよう。

翻訳の底本は下記の通りである。

Alois Riegl, *Altorientalische Teppiche*. Leipzig 1891. Nachdruck (Mäander Kunstverlag, Mittenwald 1979). V. Der Knüpfteppich im Abendlande. S. 172-214.

「オリエント古絨毯」

アーロイス・リーグル

五 西洋における添毛手結び絨毯

十九世紀には計画的にアジアで習得してヨーロッパに移植したが、十九世紀以前のヨーロッパにおける添毛手結び絨毯の技法は、限なく見回しても一八七七年のレッシングには実証できなかった (Julius von Lessing, 1843-1908 *Altorientalische Teppichmuster*, 1877, S. 7)。注がひとつ添えられている―「この十九世紀に北シュレースヴィヒのトンダー近辺 (in Nordschleswig bei Tondern) で農家の操業により添毛手結び絨毯が作られていた、と間接的に得た覚書はあるが、これ以上に詳しいことは解らないとしてよからう」。これを讀むとレッシングがこのとき眼中に置いていたのは添毛手結び絨毯の土着 (autochthon) の操業であつて (*), 外からの、とはサラセンのオリエントから輸入の操業ではなかった。他方で、厳しく区別すべき間だが、ヨーロッパ工場によるオリエント添毛手結び絨毯の模倣を尋ねる間についてレッシングは、確かに、このような十九世紀以前の模倣の可能性を完全に排除するのは正しくないと感じているけれども (同右書 S. 96)、しかし当の可能性を、ことに他の人々の推測せるフラマン人イタリア人による十五世紀十六世紀の模倣については到底ありそうにないことと説いている (同右書 S. 110)。

(*) この文脈での *autochthon* (現地生の) の語は、添毛手結びの技術はヨーロッパの地で自立的に案出されたに違いないとの意でなく、ヨーロッパにあることが実証される限りでは、この技術は、サラセンのオリエント絨毯手結びには依存することなく、ヨーロッパ入りしたであろうとの意で捉えるべきである。

それから流れた十二年後この領域を照す光はやや増して、ヨーロッパ工場によるオリエント添毛手結び絨毯の模倣を尋ねる第二の間に迷わずきっぱりと答えることは今日なお可能でないとしても、ヨーロッパにおける添毛手結び技術の土着的操業を実証できる可能性如何という第一の問については予想外に肯定的な解決が見出されている。以下これからは双つの間に自然な順序でそれぞれの論点を掲げてみたい。だが本章の結尾とは本書全体の結尾にもなるが、これは、なぜこれまでのあらゆる時代に添毛手結び絨毯の制作はこれほど圧倒的にオリエントで行われてきたのか、という原因の探究に捧げられるであろう。

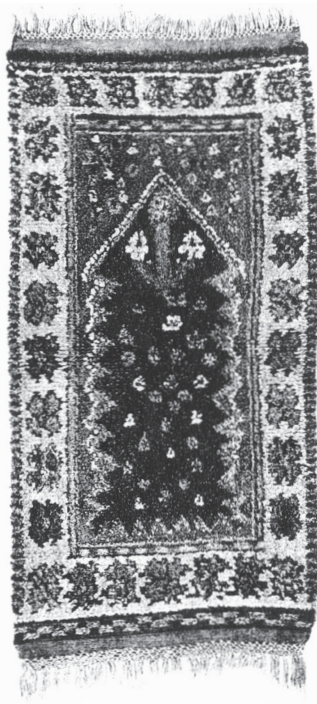
「――は本考一九頁」ヨーロッパにおける添毛手結び技術の土着的操業の現場を探すとすれば、当然ながら直ぐさま例の地方、オリエント絨毯生産の別なる技術すなわち平織り（Wilkelei）が何百年來われわれの今日まで農家の家内仕事（Hausfeld）によって嘗々と行われてきた地方へと向うであろう。そのような地方として本書第一章ではスラヴ地方の幾つかとスカンディナヴィア半島を知った。

バルカン半島、スラヴ族地方で添毛手結び技術は多々なお今日われわれの時代にまで活々と行われてきた。この十九世紀によく多くの地帯におけるヨーロッパ内トルコ人の政治的経済的解体が進むにつれて、ボスニアでもヘルツェゴヴィナでも諸他の技芸ともどもに絨毯添毛手結びの操業も消失へと追込まれている。クルシュニャフ教授「前出 Isidor Kršjavi 本論叢第百二十六集二四頁」は当時オーストリア＝ハンガリー王国の占領せる地域全部を巡ることができたが、操業中の絨毯織機には一台も出合わなかった。けれども一八八五年にブダペストで行われたハンガリー地方展覧会には多数の添毛手結び絨毯が展示されていて、これらはオーストリアの占領よりほんの少し前に当の地域で作られたはずの品々であった。

これらは技術から見ればスミルナ絨毯に最も近い品々であり、それゆえ当然至極にボスニアの絨毯添毛手結びは

トルコが起源と考えられてきた。

この見方は、ボスニアの住民で絨毯を誰より広々と使えたのがまさに回教徒^{マホメット}だけであつた事情によつて支持された。ただしここで顧みたいのは、当地で絨毯を用いる裕福な住民の大体は回教徒と重なり合うこと、反対にキリスト教徒住民は、これこそがトルコ支配に抗う最終的反乱を引起して間接的にオーストリアの占領をも招いた貧困と苦境にあつて、最後の何十年かは絨毯を求めるよりも遙かに切迫せる必要を鎮めなければならなかつたことである。



第三四図
ボスニアの添毛手結び絨毯

ブダペストの地方展覧会から「オーストリア博物館」に納まったボスニアの絨毯（第三四図）をよくよく見れば、この絨毯と疑いなくトルコ出の絨毯との親近性はごく表面的でしかないと思われる。全般的な図式は確かに原則的な回教徒祈禱絨毯の図式であるが、しかし模様は主として規則的に散在する円花^{ロゼット}から成り、例の、近代オリエント

工芸の最も墮落せる作物にですら目立つ極り切った特性の痕跡はどこにもない。したがって、一体バルカン半島では、さきに第一章で南スラヴの人々のキリム平織りについては実証することができたと同様に、十五世紀のトルコ占領以前これらの地方ですでに現地のものであった土着の絨毯添毛手結びが考えられないのか、この疑問は未解決のままとしなければならない。

残念ながら、絨毯添毛手結びについて南スラヴの人々の事情をさらに詳しく確認できるかといえは、平織りについては最も確実な手掛りを調達してくれた典拠がほとんど見当たらない。絨毯平織りならば、スラヴ出ながら（ボスニア住民の過半のごとく）回教信徒の人々ばかりか、あくまでキリスト教徒のセルビア人や一度としてトルコ人と混じる機会のなかった北スラヴのルテニア人においてすら出合えるのに、こうしたキリスト教徒全員のあいだで添毛手結びは今日もはやどこでも行われていないと思われる。確かにセルビア人は一種のフラシ天^{ビロード}絨毯を生産し、この毛羽^{フリース}は個々の輪結び（Schleife）か節玉（Noppe）で作られている。けれどもこうした輪結びや節玉^{ネップ}は縦糸に手で結ぶのではなく、織機を用い、連続の横糸を小桿^{かん}〔杖〕上に走らせて最後に毛羽〔輪結びや節玉〕は切らずに小桿を除く仕方である（*）。

（*）この技術行程の示教についてアークラムのクルシュニャフ教授に感謝するが、教授御自身、さきには当の技術で作られた絨毯を添毛手結び、絨毯と説かれたかに思われる以前の報告（Die slavische Hausindustrie, in: *Mitteilungen des Österreichischen Museums*, 1882, S. 61）を訂正された。

こうして南スラヴについては今日もはや、いかに広く絨毯添毛手結びが人々のあいだに普及していたのか、またこの添毛手結びが早くもトルコの支配以前すでに行われていたのかどうか、はつきりとは決められないのだが、代ってわれわれは、絨毯平織り（winkerei）太古の技術が土着自生として見られたヨーロッパの地理的に別なる地域内、

スカンディナヴィア半島で、絨毯添毛手結び（-krupiera）をも疑問の余地なく実証できる。

この意義深い事実を明るみに出したのは、忘れ去られた古い技芸技術や加飾形体の蘇生を目指した近代的運動の功績である。スウェーデンではことに家事助成協会 *Handarbets-Vänner* の功績となるが、協会は時代の古い国産添毛手結び絨毯の国中に散乱している残存品に注目して、農民の家内仕事（Hausarbeit）による同絨毯制作再開の道を拓こうと努めてきた。このような努力に今日の経済的事情のもとで恒久的成果の見込みが可能か否かの疑問は、この場では扱わないままで宜しかろう。この運動は、実践の結果はついに無に等しくなろうと見てすら、やはり古い時代の織布技芸についての歴史的知識を、実に本質的な点で増すことに貢献してきたからである。

さて右記ストックホルムの協会は、通例ただ断片でしか保持されていない古スウェーデン絨毯添毛手結びの残存品を収集することだけに満足せず、こうした手本に直に倣う新たな絨毯を制作させて一部は外国への道も取らせ、この遣り方で品々の詳細を、工芸への関心からにせよ国民経済的関心からにせよ当の品々に注目して追跡し活用したいと努めている場所ならばどこへでも伝えてきた。ドイツではことに新聞 *Illustrierte Frauen-Zeitung*（「婦人画報」）の出版社であり、あれこれの古い技芸技術を社交界向きとしたい自分らの努力にとつて、スウェーデンの絨毯添毛手結びには役立つ手段ありと見抜いて一冊の本を刊行した。婦人化粧室用に小さなフラシ天絨毯制作を奨めることが目的の本であつて、スウェーデン絨毯添毛手結びで用いられる双つの技術も図解されている（Frieda Lippertide（リバーハイデ） und Klara Margraff. Die Smyrna-Arbeit [刊行年不詳]）。

双つの技術の一方は実質すべてにおいてオリエントの添毛手結びと重なり合う（同右書s.36）。結ばれる羊毛糸が二本一組と見えるだけで、それゆえ個々の結び目でも毛羽立つ糸はただの両端でなく、二本一組の糸相応に二つの端と一つの輪奈であつて、輪奈は切開かれない（第七図）。オリエント添毛手結び絨毯との最も実質的な相違で



第七図 [再掲]
二重添毛の手結び

すら副次的相違でしかなく、手結び添毛の各列同士間が密でなく、つねに（八本から十本と）やや多数の横糸で相互に隔てられ、結果として、結ばれた羊毛糸は直立のままであり、横倒しとなり、こうして布地表面の見掛けがフラシ天^ビ「鶯絨^{コロド}」の感じを失って粗羅紗風になることである。

だがスウェーデンでは非の打所ないフラシ天鶯絨と見える絨毯も作られていて、しかもやや別様の技術によつてである（同右書⁵³）。ただし当の技術はオリエントの添毛手結びとは本質的に異なり、もともと添毛手結びと呼ぶことが全然できないのは、総糸^{ふさ}羊毛（Wollbüschel 本論叢第二百二十七集六三頁）の各々が（縦糸に確りと結ばれないで）ただぐるりと縦糸の周りに置かれるだけだからである。このように緩く絡めた総糸^{ふさ}を各々の位置に固着させるには、びんと異常に張詰めた強圧の横糸が必要である。しかも易々と引抜けたり抜落ちたりすることを防ぐために、置かれる「横糸の」厚い羊毛糸は三重と為し、それゆえ隣合う充填物「総状羊毛」は厚みが乏しいにもかかわらず、この厚い羊毛糸が完全一様の羊毛布地^{フリブス}（Vlies）を生じ、こうして見た目にはこちらの方が、本来の添毛手結び技術で作られた前述種類の絨毯よりも、オリエント絨毯の性状に近くなる。

前述種類の織り方をスウェーデンではリーア（*rya* [rya スウェーデン南西部の村]）と呼ぶが、前記リパーハイデ本に一八八六年模作絨毯全一枚の図版（同右本の⁵³）がある。すでに一八七六年これと全く相似る絨毯一枚が「オーストリア博物館」に納まっている（第三五四図）。双方間では模様について広い合致が見られる。あちこちの極く簡単な幾何学的装飾文様だが、わけても斜め置き方形で、これが縁取り（*Bordure*）の加飾を担うばかりか中央地の大方をも充たしている。似た有様はさきにボスニアの添毛手結び絨毯（第三四四図）でも見知ったが、円花^{ロゼット}から出たと

してよからう完全に無性格の図形が規則的に撒布という具合にして縁取りをも中央地をも充たしていた。



第三五図
古スウェーデン添毛手結び絨毯に
倣う近代1876年の模作

ただいま述べてきた古スウェーデン添毛手結び二番目の技術は、さきのリパーハイデ本第一二図の一層古い作例によって代表されているが、これは縁取りよりも確かに中央と四隅を強調してはいるものの、装飾文様の要素的・線的な様式化しか見せていないことでは一様である。このように古スウェーデン絨毯添毛手結びの性格全体は疑いなく極めて原始的な家内仕事作業の性格であって、この作業はオリエント絨毯制作の技術面でも装飾文様面でも高度な発展とは何ら直結する関りもなく、それゆえサラセントルコーペルシアのものづくり (Produktion 生産作業) に対置させて、まさしく当地自生 (autochthon) のものづくりと説明してよろしかろう。

ノルウエーとなれば、地理や気候や経済におけるスウェーデン独得の事情が少くとも同じほど強く現存するノル

ウェーでは、家内仕事の何百年も伝わる経営体制が同様に原始的な織布技術をも育成してきたであろう、とまずは見込まれた。ここにはクリスチャニア [Osloの旧称] 技芸産業 [工芸] 博物館の管理者グロシユ [前出 H. Grosch 本論 叢第二百六集二八頁] の功業があり、古ノルウェー絨毯模様についての、すでに挙げた賞讃すべき書では第八図として、添毛手結び小絨毯四枚をも掲げている。添えられた説明文は確かにただ「絨毯の各々では模様が一種のフラシ天織り (Plüschweberei) で平たい地に施されている」という短評でしかない。けれどもスウェーデンで実証された添毛手結び絨毯を思えば、当のフラシ天織りに一種の添毛手結び技術を見てもよからう、との推測は尤もなこと、この点についてはグロシユ宛手紙の問合せて十分な確証が得られた。

書翰の体裁から説明できるように残念ながら乏しい量以上に出られず、ことに技術面ではまだ最も微小な詳細までは確められないのだが、ノルウェーに関する限り、グロシユは当の品に注意を向けてきた唯一の人であり、回答は文面そのままの再掲が必要と思われる。以下の通りである——

「フラシ天技術 (Plüschtechnik) の一種で作られた、と私の論じました絨毯、いや正しくは枕覆い (Kissenbezüge) は実際に手結びの作業 (Arbeits[en] 作物) であり、言いかえれば、掲載図から十分に明かとなりますが、模様 (Muster) は、これが無ければ平たい地へと結び込まれています。ほんの序のこととして述べたのですが、そうなりましたのは、この種の織物が比較的稀にしか現れず、通例いつでもただ小布で、大抵は枕・座布団の覆いとしてだからです。また私は、この仕方で地と模様の双方とも作られた全部が手結びの作業全一枚は存じません。ただしこれまでの経験では、その種の布はやはり出て参りましょう——右のごとく結び込まれた節玉 (Nappe[n]) で裏面全体が覆われる、あれこれの二重織物 (Doppelgewebe) 、いわゆるリーア (Rya [rya]) として。この技術の当地での成立年代や起源についての詳報は私には提供不可能ですが、こうした布になお見出される事柄が、十七世紀以前に

廻ることはまずありません。模様はつねに線の形状で動いています」。

ノルウェー芸術学者の極めて有難い回答から浮ぶのは、ノルウェーで主に行われる添毛手結び技術は模様の作出だけに限られていて、地は平坦なまま、言いかえると多分ここを充たしているのは平織り（Wirkerei）であつたことである。いかなる仕方で添毛手結び自体が果されていたと見えるか、右の回答ではまだ十全に明かとならない。だがこの方向でもグロシユがやがて完全に解明するであろうと確実に期待してよい。

ところでグロシユが第八図（Fig. 8 回答書翰の続きによれば右がわの四模様）に挙げた枕覆いに注目すると、ここに見られるのは一方では、さきに第二種類のスウェーデン絨毯で見知った幾何学的線状の図式だが、並んでは、極度に様式化されてはいても判然となお認められる植物葉の具わる蔓草模様もある（第三六図）。あとの種類の枕覆い



第三六図
ノルウェー添毛手結び絨毯

は即座にエジプト織布出土品でのあれこれ方形の縫込みを思わせるが、空間分割と空間充填の原理は完全に同一的（identisch）である。後者「エジプト」のばあい技術は平織り（Wilderei）だが、これがまさしく様式面で添毛手結び（Knüpferei）と密接に触れ合っている。

ノルウェー添毛手結び作業について十七世紀以前の布は保持されていない、というグロシユの際立たせた事情は確かに嘆かわしいが、しかし、こうした品々があくまで日用品で、あらゆる布地原料のなかで最も短命な羊毛で作られるという事情を思えば、よく納得もできよう。それだけに、スカンディナヴィア現地における添毛手結び技術慣行の成立年代が十七世紀以前に遡らないことにも、抵抗感は少くなる。

デンマークやスウェーデンやノルウェーの中世芸術、いわゆる北欧（Nordisch）芸術については、周知のごとく目下これを批判的に評価するには依然きわめて状態が劣悪である。確かに多数の、ことにデンマークの研究者を信じてよろしいならば、バルト海沿岸諸国はローマ皇帝時代すでに中世文化とほとんど対等の文化を所有していたことになる。この見方によれば、異教のノルマン人が早くも絨毯添毛手結びを行っていたとの仮定も、全く信じるに足りぬとは思えなくなろう。しかし偏見なき歴史研究の前では右の空想的所産はもはや存立不可能である。

冷静な芸術史研究にこれまで確認できた限りでは、中世に出たデンマークおよびスカンディナヴィア最古の芸術品で国内の原産に疑いなしの品々には、われわれがドイツのカロリング朝やオットー朝の芸術で出合う類の「古代様式模倣の」擬古的特色が刻まれている。

しかも北欧諸国では、こうした形式がルネサンス時代にまでも保持されている。となれば特殊研究が従来より精確な年代を確定できない限り、一体、北欧の添毛手結び技術は例の、九世紀から十一世紀におけるドイツ・フランス・アングロサクソンの文化に触れることで北欧人のものとなり（*）、さらにはこれらの文化から後期古代の遺産

として受取ったことになる芸術慣行に算えてはいけないのか、という疑問は未解決のまま残つてゆく。なぜならば、右の中央ヨーロッパ諸国では進歩せる経済事情がほぼ到るところで久しく家内仕事（Hausfeib）の原始的経営体制を越え出ていて、結果として、この体制相応の原始的な平織り（Wirkerei）や添毛手結び（Knüpfung）の技術も久しいことと不可能になつていたのであるから、これら諸国における添毛手結び技術の往昔の操業を直接に証明することとはもはやできないとしても、それでもやはりわれわれは、バルカンとバルト海沿岸なる当該技術は明白な双つの操業地域間の広い間隙を何とか強引に一跨ぎと^{また}考えたくないのであれば、当の技術が初期中世に中央ヨーロッパでかなり全般的に普及していた、と仮定しなければなるまいからである。

（*）他方で原始的な平織りは、疑いもなく北欧人にとつて、すでにキリスト教民族との接触以前から周知の事柄であつたとしてよからう。

この十九世紀になお北シュレースヴィヒのトンダー近辺（in Nordschleswig bei Tondern）では農家の経営で添毛手結び絨毯が作られていたらしい、とレッシング（前出 Julius Lessing）に例の覚書があつたが、これを思返すのに好い場所もここであろう。周知のごとくスカンディナヴィア半島が長年ごく最近に至るまで他のヨーロッパに向けて取続けた孤立は、ユトランド半島にも、また幾つか北ドイツ隣接地域にも拡がっていた。それゆえレッシングに届いた知見としての伝統には完全に根拠があつたと見て、どこまでも間違いあるまい。

したがつて、自国の、とはサラセンには依存しないヨーロッパの絨毯添毛手結びは存在したのかと問えば、今日ではまことに明確に、自国の絨毯添毛手結びはスカンディナヴィアでは十九世紀初頭にまでも行われていた、しかも生業風ましてや工場式にでなく地方農民の家内仕事（Hausfeib）の経営として行われていた、と答えることができる。

それでは「二」は本考九頁第二の問への回答に向おう——これまで家内仕事による操業について述べてきたが、並んではヨーロッパで、オリエント絨毯の意識的模倣、とりわけ豪華品の模倣（Imitation）は起きていたのか。このことはすでに、必要とした章「第一章」のために、ただ職業としての経営問題と見てでしかなかったが考えることができた。しかもその際ただ飾り方形式の模倣ばかりでなく技術の模倣をも念頭に置いたが、反対に、オリエント絨毯装飾文様法の、例えば天鷲絨機織り（Santweberei）など何か添毛手結び以外の技術への転用の試みは、ことごとく、われわれの考察から排除していたとしてよい。

この意味ではバリのサヴォンヌリ絨毯 [Savonnerie 十七世紀に Chailot の石鹼工場跡地に建設、十九世紀にバリのゴブラン工房 Gobins と合併] の製品をも完全に度外視して宜しかろう。綱領で確かに創業者たちはペルシア絨毯トルコ絨毯の模倣を謳っていたものの、しかしここでは、高度の人の手が直に要求されることで無論ヨーロッパで他に行われていた同種機織りとは区別されるにせよ、やはり最初から一種のフラシ天「鷲絨」機織り（Düschweberei）が用いられていたと思われる——ちなみにこれは十七世紀初頭における成立期に出た有名なサヴォンヌリ絨毯作品群から教えられることであり、こうした作品の成立は完全に十七世紀フランス芸術に属する事柄なのである。なおアヴァとヴァシヨン（Henry Havard, 1838-1921 et Marius Vachon, 1850-1928）^{（*）} は、あいだに生残っていた伝統を仮定すると十三世紀の tapiciers sarazinois（本書 S. 17ff. 本論叢第百二十六集一六頁以下。サラセンの絨毯の作り手）と「十七世紀」サヴォンヌリ絨毯の創立とを結付けたいと努めていたが、サヴォンヌリ絨毯の制作は明かに十三世紀の tapiciers sarazinois とは何の関りもない。だが当の中世の tapiciers sarazinois による制作として添毛手結び絨毯を思えばよいのか平織り絨毯を思えばよいのかの疑問については、本書 S. 19（右記論叢一八頁）の詳説を引いて、未解決のままとしたい。

(*) Henry Havard et Marius Vachon, *Les manufactures nationales—Les Gobelins, la Savonnerie, Sèvres, Beauvais*, [1889] p. 308. この書には従わなくてはならないとして執筆せる下記の私の織布芸術史—Riegl, *Textile Kunst*, in: Bruno Bucher, 1826-1899, *Geschichte der technischen Künste*, [Band I, II 1875] Band III, 1893, S. 372. であったが、この態度を右の言葉ではつきりと撤回する。

ヨーロッパの早い世紀におけるオリエント絨毛手結び絨毯模倣の存在は、これまでのところ依然として、あらゆる疑念を吹飛ばせる具合には実証されていない。関りある報告や推測のすべてが結ばれる場所は、オリエントと何らかの近い、関係にあった諸々の国土 (Länder [Land]) である。イタリアとスペインでは十五世紀十六世紀の、すなわち、さき (本書 S. 7. 本論叢第二百二十八集一一頁以下) に見たごとくヨーロッパの別の方面からも大きな需要のあったことが立証される当の時代の通商関係があった。ポーランドではあれこれの対タタール「トルコ系諸族」戦争がオリエントとの間近な接触を生じさせたし、ポーランド人学者の言ゆえ特に傾聴しなければ、とあくまで思込む姿勢には程遠いとしても、さまざまな工芸の領域で当の接触の痕跡を観取できることは明かである。

まずはイタリアについてだが、この国からは確実な認証がひとつも出ていない。関りある推測が成るのはすべて、ルネサンス時代にイタリアの、ことにヴェネツィアにおけると思える織布芸術が現に無数の着想 (Inspiration[en]) をオリエント装飾文様法の圈内から得ていた、という事情によることではない。オリエント本来の独得の織布とは添毛手結び絨毯を指すが、これを頭のなかでオリエント装飾文様法と混和させてしまう具合にして、オリエント絨毯のイタリア式模倣なるものの推測が生じたとしてよからうが、この推測にはさらに、技術を知らぬ無知も、すなわち今日なお公衆間では普通となっているような平織り (Wirerei) と添毛手結び (Knüpferei) とフラシ天機織 (Püschweberei) との無批判な混同も与^与つてきたであらう。とりわけ人々は早い時代には、金糸混入地にオリエ

ント風模様の織込まれた、いわゆるジェノヴァ天鵝絨（Genueser Samt[e]）を、本書第三章で記述せる種類のペルシア絨毯（Susandschird）と取違えていた。

スペインの申分についても事情はさほど変りない。この方面で今日まで一般に知られてきた事柄は、大体のところリアニョの辛うじての報告に限られている（Juan Facundo Riaño, 1829-1901. The industrial arts in Spain. 1879. P. 266ff. 叢書 *South-Kensington-Museum-Art-Handbooks* 内の一冊）。同書には十六世紀文筆家の数多い引用で、スペイン産 carpets が話題のはずの言及も見られる。英語使用者によるとなればカーペットの語で敷物絨毯（Fußteppich）を思いたくなくろうが、この思込みを直ぐさま不確かとさせるのは、リアニョが当の carpet の語を tapestry（Wirkerei 平織り）と同義に用いて、しかも同章残余の頁全体でほとんどゴブラン織のことしか扱っていないからである。それでも最後（p. 270）には「トルコ様式の織麗な絨毯」を語って、これは十八世紀後半の Cornel. Vandergoten によるマドリッド Sta. Barbara のゴブラン織工房出来の品であろうとしている。こうしたあれこれ不明瞭な示唆については仕方ないとするが、同書には事柄を明快にする図版の呈示もないので、覚書の全体を挙げても何ひとつ始めることができない。

比べると前出ロビンソンの書には第九図として一絨毯の隅部が掲げてあり、これを著者はきつぱりと十七世紀初期に出た「スペイン南東部」アルカラス（Alcaraz）の品と説明している（Vincent Joseph Robinson, Eastern carpets. 1892-93. 本論叢第二百二十七集六八頁）。この絨毯隅部の装飾文様は確かに、ロビンソンも認めるごとく完全にペルシア風であり、通例の花蔓（Blütenranke）が伸び、あいだに撒かれているのは走る豹（Panther）と、羚羊（Antilope）を引裂いている獅子（Löwe）である。にもかかわらず、これはスペイン産とする仮定へとロビンソンを向わせたものは、縁取り（Bordüre）に撒かれているスペインの紋章（Wappen）である。

この仮説をさらに支えるとしてロビンソンの挙げ得る根拠は、あとはただ、アルカラス周辺の獣毛が完全に「ペルシア」ホラサン地方マシヤド (Mesched : Mashhad in Khoras[s]an) の獣毛の長所を具えている、ということしかない。だが指した地方がアルカラスとあらば、この指示がよく物語っているのは、カール五世「一五〇〇―一五一九―一五五六。一五一六年以後同時にスペイン王カルロス一世でもある」時代そこには絨毯工房があつたらしいとの情報をロビンソンが得たのは、まさしくただ当地からでしかない、ということである。ところがリアニョはアルカラス以外にも幾つかの都市名を挙げている。このように不確かな材料が土台では、一体スペインではオリエント絨毯を模倣したのか、という問にはおよそ決定的な答を返せない。しかもロビンソン自身が、スペイン・ポルトガルの貿易はオリエントから大量の絨毯を仕入れていて、注文品には注文主の紋章を織込むことができた、と認めている。このような成行き of the 起り得たことをさらに高めるのは、ヨーロッパ向け輸出品と決められたオリエント奢侈絨毯の大部分がひとつひとつの例では必ず仲介商人によつて特別に注文されていたはず、という事情であり、このことは、ヨーロッパの影響ではびこる墮落にもかかわらず今日でもなお、東洋人を市場用在庫品を蓄える工場生産へ向わせるのが難しいのと同様としてよい。他にもオリエント絨毯の制作がすでに技術的根拠からして必ずや工場経営に敵対となることは、本章をさきへ進めるにつれて、なおも詳しく論じるであらう。

オリエント添毛手結び絨毯模倣の最も明確な報告をわれわれはポーランドから得ている。だが残念なことに、ポーランド地方研究あれこれの方面についてと同じく、二次的源泉から出た報告だけである。ごく最近ではコフスキ (Julian Kolaczowski) (*) が最も精しく扱っている。ポーランド絨毯製造 (Fabrikation 工業生産) のペルシア模様模倣についての報告はすべて、Mażarski (マジャルスキ) なる名に結ばれていて、時代を見れば十六世紀から十八世紀のあいだで揺れている。

(*) Julian Kolaczowski, Wiadomości dotyczące się przemysłu i sztuki w dawnej Polsce. Krakau 1888. 卷二レムベルク一八八六年 *Czasopism techniczny* 誌掲載の講演 Władysław Rebczynski, Rys historyczny fabrykacyi gobelinow w Francyi i o gobelinach w Polsce. もある。関連する幾つかの書簡報告を頂戴したことも私は、レムベルク [Lviv] のレプチンスキおよびクラカウ [Kraków] のレプシュ (Lepszy) 両氏に感謝する。

著書のなかの「絨毯 (Teppeiche)」を語る章でコワチュコフスキは、流布している無批判の遣り方で、平織り絨毯 (Wirkteppich) と添毛手結び絨毯 (Knüppteppich) とを混同する。Jan Mazarski については同書二四六頁で以下のごとく語られる。——マジヤルスキは十七世紀末に国王 Johann Sobieski の兵士として対トルコ戦で奉仕する。捕囚となり十年あまりベルシア絨毯の工場で働いたらしく、故郷へ帰還後、習得せる腕前で君侯 Hieronymus Radziwill の注目を引き、君侯はまたマジヤルスキを今度は自由の身としてトルコへ赴かせたらしい。この第二回オリエント旅行から戻るとマジヤルスキはShuck [スウツク 今日のパラルーシ首都ミンスク南方の都市 Slutsk] にベルシア絨毯・ポーランド帯の工場を設立したようである。マジヤルスキ製品 (Fabrikatle) これをコワチュコフスキは絨毯とは明言してゐない) には Mazarski なづし Mazarski fecit [製] の商標が入る。ただし M と思われる印章が君侯 Czartoryski 所有絨毯の縁取り (Bordüre) に見られるが、これは特製絨毯の印章として際立っている。

マジヤルスキ製品の始まりを述べた右の言葉は大体のところ完全に信頼できるであろうが、ただひとつありそうでないのは、まさしく最も大切な要点すなわち、マジヤルスキによるベルシア絨毯の技術習得についての話である。ベルシア流に磨きのかかった添毛手結び技術に少しも通じていない男が一工場で、つまり奢侈豪華絨毯制作の工房で仕事に携わった、などとは容易く納得できることでない。しかしまずはマジヤルスキについて何ら疑いない確証のある事柄、いわゆるポーランド帯 (polnischer Gürtel [kontusz belt]) の工場生産 (Fabrikation) を頼りにしよう。

装飾文様法に歴然とペルシア的要素のある、そのような帯は実際にポーランドで、ことにスウツクで作られていた。このことがコワチュコフスキに著書の一章「帯 (Gürtel)」(S. 423)でまたもマジヤルスキに言及の機会を与えたが、先立つ二四六頁ではすでに絨毯のほかペルシア流帯織り (Gürtelweberei) 導入をもマジヤルスキに帰していたのである。だが説明は以前とやや異なっていて、わけてもマジヤルスキは、ここではもはや当工業ただひとりの創立者でない。同章の記述によれば、スウツクの帯工場 (これとの関りでは絨毯への言及は全然ない) は一七五〇年ごろ君侯 Michael Radziwill により、しかもここへ呼ばれたペルシア・トルコ労働者の助力で建設されたいい。もともと工場は君侯自身の管理で動いていたのであろうが、七年後に「トルコからきたキリスト教徒の新参者と呼ばれている」Jan Mazarski が指導を引受けたらしい。この人物がコンスタンティノープルから必要な織機 (Webstuhl) を持込むが、少しづつであったのは、トルコ人の目には隠さなくてはいけないことだったからに違いない。後年ヤン・マジヤルスキは工場を自己所有のものとして息子レオ (Leo) に相続させるが、レオは一七八一年に自分自身を「スウツク・ペルシア工場支配人 (Vorstand der Stuck persischen Fabrik)」と呼んでいる。

このスウツク・マジヤルスキ帯工場についての説明は点検できる限りでは完全に真実にもとづいていると思える。年記は別方面からも確証されるし (下記の説明報告を参照のこと) — Rechenschaftsbericht der Kommission für Kunstgeschichte an der k. k. Akademie der Wissenschaften zu Krakau 1889, S. LX) — 当工場の成果についても正真正銘の品が Mazarski か Mazarski fecit か Leon Mazarski の署名入りで保持されている。ところが高まるのは、ポーランドへのペルシア絨毯添毛手結び導入についての最初に与えられた説明と合わない由々しい疑念と矛盾である。言いかえると Jan Mazarski が最初一七五七年からスウツク帯工場監督であったならば、さきの早くも国王 Johann Sobieski のもとでトルコ人と戦闘せる Jan Mazarski とは同一人物であることが難しくなる。この時代のずれをコワチュコフスキ自

身も感じているらしいのは、「帯」^{ベルト}の章では一言も絨毯に立返らないからだ、それでも「絨毯」の章でははっきりとポーランド・ペルシア帯機織り^{はた}はJan Mazarskiが創始者と説明していたのである。したがって、マジヤルスキによる絨毯添毛手結び導入の説明を救うためには、これと結ばれている断然明確な年代報告を放棄するか、それともJan Mazarskiなる同名の別人ふたりが存在、ひとりは絨毯工場を、ひとりは帯機織り^{はた}をオリエントからポーランドへ移入した、と仮定しなければなるまい。さらに、戦争捕虜マジヤルスキによるペルシア絨毯添毛手結びの習得、言いかえるとペルシア絨毯工場での作業従事の話はどう見ても（as understood）ありそうでないことを思えば、以下のごとく、ポーランド・ペルシア帯工場^{ペルト}の創設者ではなくともやはり主要促進者と見てよからう。Jan Mazarskiの名は、ポーランドにおけるペルシア絨毯制作と類縁の帯^{ベルト}なる対象を際立たせるためにだけ製品と結びけられたのではないか、という推測が念頭から離れない。

けれども、このマジヤルスキ問題の解明は、ポーランド地方研究によつて第一次史料が批判的に周知のものとなるまでは、ことごとく空しい作業に留まる。ようやく十八世紀に、とは今から百年をさほど越えないころに花開いた芸術小枝「工芸」の痕跡がこれほどにも完全に消失し、この十九世紀での記憶に遡れる限りでは、スウツクなる以前の育成地にして、もはや過去の工業を思出させるものは何もなく、関連ある勘定書や契約書、等々も全く保存されていない、などということもまた、きわめて憂わしく思えるに違いない。

さてわれわれは、文書記録の批判から離れて直^{じか}の絨毯考察に向いたいが、これらの絨毯とは、かなり真剣にポーランド原産と裏付けられる品々のことである（現今ガリツィア地方の私有物から現れてくる古い添毛手結び絨毯は、みな決り文句でマジヤルスキ絨毯と呼ばれてしまう）。こうして、年記および署名を欠くゆえに完全な結論となる成果はここでも入手できないとしても、やや確かな土台の上には踏込める。

ポーランドの工場製品にしたいとこれまで思われてきた絨毯は、実質的には二群に大別される。第一群、「二」は君侯 Czartoryski (ツァルトリスキ) の所有物に見出される一連の絹製絨毯 (Seiden-「Tepich」[e]) である。知られるようになったのは、わけてもトロカデロ [「Trocadero スペイン南西部港湾都市 Cadix の要塞」] における回顧展によってであり一八七八年以後のことである。添毛手結びの模様は蔓草で、パルメット風の花々やギザギザに尖って長目の草葉が纏わり、本書 (原文53本論叢第二百二十八集二五頁) に挙げた古いペルシア工場製絨毯に見るごとく、完全にペルシア風に様式化されている。地は金糸銀糸であり、ほかに幾つも繰返し取付けられているのは君侯ツァルトリスキの紋章だが、これは添毛手結びによってでなく「平織り」で織込まれている (eingewirkt & einwirken) (*)。

(*) 同は「オーストリア博物館」Direktor Julius Lessing の暖い手紙の報せに従っての記述だが、ポーランド絨毯工業の問題では他にも価値ある報知を多々ありがたく頂戴している。

この種の絨毯全一枚の図版がギシャール＝ダルセル共著 (Edouard Guichard, 1815-? et Alfred Darcel, 1818-1893, Tapisseries décoratives du Garde meuble [1878]) の第七四図である。この作例で Mazarski を指す根拠とされているのは、恐らく主に、縁取り (Bordure) に絶えず繰返される図形で、そのつど「外科用ナイフの」ランセット形の葉に囲われた長目の添花パルメット (Blütenpalmette) によってのことであるが、これを人々は M、すなわちマジヤルスキの頭文字で当の絨毯の商標と呼びたく思っている。この説明の確かさには早くもダルセルが疑念を表していた。われわれが見ても到底この説明は持堪えられないものでない。ポーランド原産としてよい証拠をさらに紋章に見たいとすることもできようが、すでにさきほど強調した通り、注文でも紋章調製はオリエント人自身の手で可能なことであつた。こうしてわれわれの判断に残される頼りは、ただ装飾文様の出来如何の具合だけとなる。この点ではすでに、装飾文様の諸要素はペルシア絨毯装飾文様法から忠実に取出されているらしく見えることが際立っていた。だがあ

れこれの細部、ことに例えば縁取り（Bordure）で **M** と解釈された長目の添花パルメットや、これらパルメット同士のややぎこちない繋げ方は、もとより可能性の範囲内でのことだが、この絨毯は実はペルシア原産でなく、ペルシア原産品のヨーロッパ模造作でないかと思えるのである。

ツアルトリスキ収集品二枚目絨毯の隅部の図版がりエーヴル本の第六〇図として見られる（Edvard Lièvre, 1828-1886. Les collections célèbres d'œuvres d'art. 1866）。ここに紋章は認められない。添花パルメットの様式化は一枚目より精確にペルシアの規準に従う。だが蔓草はまことに厳格な丸みを見せて、ほとんど律動的な配列であり、このことはペルシアの遣り方と合わず、むしろはるかにイタリア・ルネサンスの性格を思わせる。それゆえユーリウス・レッシングは躊躇なく、この絨毯をヨーロッパの模倣作と見做している。当然ここには、右の蔓草処理の特異性を模倣図案家の所爲にできないのは確かとなるだけで、たちまち異議が寄せられないか、と反論も出よう。けれどもレッシングは一八七八年にパリでツアルトリスキ絨毯を見ているのであるから、判断はりエーヴル本の図版に左右されることなく、原品の有るが儘の姿にもとづいているとしてよからう。

さて当の絨毯の年代規定については、ツアルトリスキ家族の言伝えで十六世紀とされていて、この見方はかなり一般的に識者のあいだでも共有されている。正しいとなれば、しかも加えて、ことにリエーヴル本図版絨毯の図案がルネサンスの性格を実際に潜めていると信じてよいことをも顧慮すれば、確かにギシャール・ダルセルは共著本におけるツアルトリスキ紋章入り絨毯を、年代はもとより十七世紀として Mazarski に遡らせているにしても、十八世紀におけるヤン・マジヤルスキ工場との連関については何ら問題となり得ない。

ポーランド原産との声を挙げる絨毯の第二群、「二一は二六頁」が際立つと見えるのは、外目にまことに特性ある仕方と映る、完全に独得の彩色、「色彩付与」である。言いかえると第二群であくまで優勢なのは、黄色にまでい

たる基調の茶色であつて、これが多く金糸銀糸によつて強められ、ごくわずかしかならば青などで弱められることがない。ペルシア絨毯の輝く赤色が全く無い、と気付くのである。模様は全般としても細部でも確かにペルシア蔓草文様法にそのまま頼っているものの、しかし細部の実際では数多く異様な変形を示しており、この変形はこれだけを見れば恐らく、われわれこれまでのあらゆる経験に照してオリエントの、とりわけペルシアの色彩感とはほとんど合わない彩色「色彩付与」が、仮に法外な模倣を思え、と厳しく強要したのであれば、多々証拠もあるように、古い形体が誤解されての墮落としても説明できるであらう(*)。

(*) もとより言及せずには済まされないことだが、モンゴル族由来の絨毯(ロビンソン本第一〇図)は茶色の基調を示して赤色は完全に抑えている。しかし話題にしている第二群絨毯の装飾文様法は、これら絨毯と中央アジア絨毯添毛手結びとは連関ありなどと気安く結論を出せるには、あまりにもペルシアの手本と直近であり、金糸銀糸の拵えでありにも豪華すぎる。

この種の絨毯が世に出るのは異常に稀なことと思われる。最も教えるところの大きい第一例はロビンソン本第一一図としての彩色図版である。ここでは編者の的確な評語のごとく主として縁取り(Borture)に図案の非オリエントの性格が際立つ。この第一例に中央地の図案で最もよく似る第二例「ウィーン絨毯」は「オーストリア博物館」にあり、縁取りは第一例より忠実にペルシアの花蔓草に倣い、金糸銀糸は八条縐子(原文の *8* 本論叢第百二十九集一七頁)の図式で嵌込まれている。第三例は最近ガリツィアに出て筆者「リーゲル」の知る品となったが、当地の Marian von Bogdanowicz 氏所有の絨毯である。これには確かに金糸銀糸が無く、中央地の図案も諸要素は前二例と同じでありながら配置にやや違いがある。縁取りはウィーンの例に見られるものと似ている。だが彩色「色彩付与」を見れば、この第三例絨毯が前二者と共属の品であることに何ら疑いはない。縁取り(Borture)を囲う外縁(そとべり)

(Saum) が「ウィーン絨毯」の外向き外縁部にやや例外があつても、外に向けては大きな花と小さな葉とが交代する波状蔓草、内に向けては順々に並ぶフォークき叉と、三例すべてにおいて完全に同一的 (identisch) であるという事情によつて、証拠は一層完全となる。

こうして持上るのは、第二群の絨毯をポーランド原産に遡らせてよい保証は何か、の間である。

ロビンソンは自身で公刊の絨毯をマジヤルスキ製で十七世紀に成つた品とした。さきに見た通り、この申立てでは人物名と年代とが双方互いに旨く結ばれない。またロビンソンは報知の出所も語っていないので、最もありそうなこととして残るのは、当の絨毯を直にか仲介じかによるかしてロビンソンが入手、その地ポーランドでは家族の言伝えて、絨毯は遡つてマジヤルスキ製の品にされていた、という筋である。前記ボグダノヴィチ氏の絨毯はマジヤルスキ製なる保証をやはり家族の言伝えに負うている。「ウィーン絨毯」はエンゲルト (Engelth) 遺品オルクシモン競売で獲得されたが、恐らくは当時ガリツィアから、このウィーン芸術家の所有になつていたのであるう。

こうして三枚のうち二枚は言伝えてポーランド産と説かれてきたと思えるし、三枚目については少くとも別方向からの由来は唱えられていない。それゆゑ第二群全部がポーランドから出たのは本当らしいことになり、マジヤルスキによるスウツク原産すら絶対不可能とは決めるまい。第二群成立の年代を、スウツクでマジヤルスキのひとりが織布工場を指導した証拠のある十八世紀にすることには、何ひとつ原則的に反論できないからである。しかしながら、われわれの目的にとつて、同時にまた本書の内容全体との関連において最も重大であるのは、ただいま述べた第二群の絨毯には、最大限にあり得ることとして、ヨーロッパの仕事をみるべきであり、同時にまたオリエント添毛手結び絨毯の十九世紀以前におけるヨーロッパ模倣作業の存在証明を見るべきである、ということである。アルカラス絨毯にせよポーランド絨毯にせよ上述の例すべてで話題となるのは奢侈豪華絨毯の模倣のことであ

る。日用絨毯の模倣は南スラヴおよびスカンディナヴィアの土着自生の添毛手結びを度外視すれば、さらに微々たる実証しかなく、これまで一度として重大な推測も知れ渡っていない。このわれわれの十九世紀に初めてオリエントからヨーロッパへと日用品に使える技術の移植が試みられた。例えば五十年代プロイセンのシュレージエン(Schlesien ポーランド南部地方)においてであり、続いてはヨーロッパ諸他の地方においてもであるが、ただしこうして工場経営の道での特別の成果は狙いもせずである。

オリエント絨毯添毛手結びをヨーロッパへ導入しようとする直の差迫った刺戟はあれこれの工芸改良運動(kunstgewerbliche Reformbestrebungen)に求めつよく、すでに十年ほど広範囲に潜在していたものが一八五二年の展覧会「一八五一年のロンドン万博に続くVictoria and Albert Museumの開設時か」で一挙に突発、運動最初の目標をオリエント芸術の研究(Studium)に模倣(Nachahmung)と定めたが、このオリエント芸術とは、一方で改良運動の先頭に立つイギリス人の格別よく知るもの、しかし他方で大陸人も、ことに世俗芸術の品々では比較的最も詳しい事柄であった——ゴテイクおよび教会芸術への心酔がヨーロッパの芸術生活を支配していた時代のことである。

そもその最初からオリエント絨毯は行動の前面に登場したが、理由もよく解る。動物の景観か世態の情景で彩色も不愉快な一八五〇年代織成のヨーロッパ絨毯と、幾何学的か様式化植物の装飾文様で、けばけばしくとも調和よき彩色のオリエント添毛手結び絨毯とを比べるがよい。これだけでオリエント絨毯の卓越性と、工芸改良を志す手本たる重要性とは摺めるであらう。同じ意味でゼムパーの助成も決定的に作用した——とりわけ織布芸術の様式についての研究で、確かに経験的知覚にもとづいてというよりは直覚的予感においてではあったが、オリエント絨毯内に、古代の壁張りや飾粧ものの全体の諸要素を認識して以来のことである。こうしてオリエント絨毯では魅力ある今日の性状と意義重大な過去とが一体化され、努力目標たる工芸改良の内部ではヨーロッパの公衆に、芸術的価

値は最高度であり模倣すべき的として、オリエント絨毯を推奨するまでになった。

あるいはこの事情が真先に働いて、一八五〇年代に模様ともどもオリエント敷物絨毯技術のヨーロッパへの導入が試みられたのかも知れない。けれどもヨーロッパ人によるオリエント絨毯評価の年代はようやく近代の工芸改良運動に始まるとしたり、オリエント絨毯の長所への理解をわれらが十九世紀のロマン的陶醉としか見ないのでは、思違いであろう。すでに別の関りで（原文の註、本論叢第百二十八集一一頁）古いドイツ・ネーデルランド巨匠十五世紀十六世紀の絵画にオリエント絨毯模様が描かれているのを見たが、模様には幾何学的装飾文様や様式化の強い植物的装飾文様もあり、こうした装飾文様の余響は今日なお小アジア絨毯添毛手結びの所産に認めることができる。だが十五世紀十六世紀の西洋に、意識せる訓育的傾向ある今日の意味での工芸改良運動はなく、存在したのは、悟性的反省など知らずに古代のもの異国のものを、ただそのときに必要というだけで取入れてゆく素朴な芸術創造活動であった。したがって古ドイツの巨匠がオリエント絨毯を模写したのは、この方が自国産絨毯よりも様式的にいと見えたからでなく、あれこれ画中に呈示する特別の品々となれば、当時でも上流人士のあいだでは好んでオリエント絨毯が用いられていたからである。

だがこの事情はさらに遠くまで歴史を遡ることができる。ギリシア・ローマの文筆家はまことにしばしば、しかも力を込めてオリエント絨毯を語っている。わけでもバビロニア（bablyonisch）絨毯が多々話題となるが、ユース・レッシングの適切な評語のごとく、この呼称は地理学的意味で嚴格に取るよりも、むしろ今日われわれがペルシア絨毯と言うのに似た総称と見るべきである。あれこれ関連する報知については残念ながらもまだ言語学の方面から精確な解釈が企てられていないので、ここでは、古代西洋とオリエント絨毯との関係についての諸報知の実質を、十二年前にレッシングが総括した言葉を繰返すだけにする――

「心惹く言葉はまことに多いが、結局のところ話題の品の、由来についての精確な情報でもなければ、まして技術や模様作りの紹介でもない。ただ、ギリシア人・ローマ人にとってアジアの絨毯が広汎に普及せる贅沢品であったこと、だけは明かであり、全体として見れば、絨毯についてはまさしくわれわれにおいてと同様、何かを言いたければ、アジアもの、と賞めることができた」(Julius Lessing, Altorientalische Teppichmuster, 1877, S. 9)。それでもヘレニズム・後期ローマの時代では、風俗や技芸による多様な感化を語るのはよいとしても、オリエントによる工芸改良運動については断じて語ってなるまい。

このようにヨーロッパ人のオリエント絨毯に寄せる理解と愛好は遠くギリシア・ローマの古代へと遡るが、それだけにますます不思議なのは、あまりにも永くヨーロッパでは自国での絨毯模倣の試みを決意できなかったことであり、あれこれ長たらく、のろのろとして出費多き交流法しかなかったのに何世紀にもわたり、われわれの時代にまで模倣について躊躇^{ためら}い、現在は新発明の交通手段に助けられて以前よりはるかに迅速好便に運べるのではあるうが、オリエント絨毯の需要にはひたすら輸入によって応じていることである。この不思議な事情に説明を乞う問は、*yuuki* (原文 S. 184 本考一七頁) に述べた意味で仮定して、初期中世の時代に添毛手結び技術の育成は実際にヨーロッパで弘く流布していたはずで、このことから、もとより作業も原始的家内仕事 (Hausarbeit) のものづくりを越えはしない添毛手結びの心得はあったのに、これを大方のヨーロッパ文化国家で中世の終りには自発的に放棄した、という推論は不可避である、と見るならば、なおさら大切な問となろう。ヨーロッパ人がこのように自動的にオリエント式絨毯添毛手結びの作業を差控えたことの説明には、二つの可能性しか目に入らない——ヨーロッパ大地での絨毯添毛手結び導入は欲しなかつた (wollten \wedge wollen) 、あるいは出来なかつた (konnten \wedge können) 。

「欲しなかつた」の方は最初から退けてよい。西洋では芸術創造の活動がどれほど素朴なときでも、技術であれ

裝飾文様法であれオリエント芸術の一部門をまるまる自身の大地へと移植することに、恐れて後込みなどしなかったからであり、このことは十三世紀十四世紀のサラセン化する絹仕立イタリア平織りが疑問はいずれも撥ね除けて証明する。こうして残るのは他方の仮定だけで、ヨーロッパの大地でのオリエント絨毯制作は引継ぐことが、あるいはまた、一度は我物にしたものの永続的には保持することが「出来なかつた」のである。

だが障害となる困難が純技術的な性質のものでなかつたことは確かである。さきに本書第二章で、豪華な仕事に應用のばあいですら必要としたのはただ、ひとつひとつの添毛手結びを順々に並べてゆく、やや高度の精確さと器用さだけと学び知つた通り、添毛手結びとはかなり簡単な技術だからである。そこで困難は何か二次的な事情にあると探してきたが、このさき見るように、あれこれの事情は、当の技芸がオリエントで普及し長寿を保つてきたことにとつて実質的に大事であるのは確かでも、決して、ヨーロッパで養育の織布技術圏内からオリエント技芸は排除という事柄を説明してはくれない。

例えば、オリエントでは太古の昔から西洋においてよりも、あらゆる種類の絨毯、とりわけ敷物絨毯 (Fußteppich) への需要 (Bedürfnis 必要) がはるかに大きかつた、と言う。しかも正しいことだが、オリエントにおける絨毯は原則として椅子類 (Stuhl) だけでなく布張り床 (gedielter Boden) 自体をも代表していた。とは言われても敷物絨毯はあらゆる時代にヨーロッパ人の需要でもあつたし、この需要が、当今では恐らく往昔よりも一層広い住民圏で見られるにしても、何百年來ただ宮殿や教会でばかりか裕福な市民の家でも存在していたことは知れ渡っている。

いつの世でも絨毯添毛手結びはオリエントだけに限定のまま、という事情を説明したい別の試みは、まずは羊毛、さらには絹なる原材料 (Rohstoff) がオリエントでは西洋においてよりも手軽く、しかも相応以上の高品質で入手できた事情に言及する。この論拠も、なお別なる連関で見ると、当の芸術小枝がオリエントで枯れずに花を咲

かせてきたことの説明には重々しく大切だが、しかしヨーロッパのもののづくりから当の小枝を取払うこととの関りでは何の意味もない。いかなる種類の羊毛、のちには絹にも西洋に不足はなかったからであり、絹文化がまだヨーロッパに導入されていなかった時代でも、織込むために粗絹が要となれば、まことに広く交易による対策が取られていたことは実証できる。粗絹よりも大量にヨーロッパで必要となれば即座に、どうして同じことが羊毛について起り得なかったであろうか。

やはりオリエント絨毯制作の西方文化諸国への導入を妨げた困難は間違いなく別方面にある。こうした困難本来の源泉を会得するには、はつきりと見えるオリエント絨毯制作今日の実態を眼中に納めて、結果から原因を得る逆推理のために、オリエント絨毯づくり今日の繁栄や後退を助けたり妨げたりしている事情を探るのが得策であろう。オリエントにおける古い絨毯づくりを今日あれこれの点で不可能にさせている事情と、回顧する限り、これまでヨーロッパ西方において当のもののづくり (Produktion) の根基確立を妨げてきた事情とのあいだには、とにかく類似 (Analogie 四二頁参照) が現存するに違いない。

御承知の通り、品質および芸術面つまり色 (Farbe) についても模様 (Muster) についてもオリエントから届く新来絨毯が悪化してゆく嘆きの声は年ごとに増している。このように墮落の深まる原因としても全く適切にヨーロッパ工業 (Industrie 産業) との接触が挙げられてきた。市場製品を貯える工場経営で時間と経費をできるだけ節約しつつ前進するヨーロッパ工業の向う先で、古いオリエント絨毯制作は破損され解体され、終には完全に退却させられる。

全く疑いがないと思えるが、伝来のオリエント絨毯制作は支配的なヨーロッパ経営体制には合わないのである。

合わないことの究極的根拠は、オリエント絨毯の、平織りの形式でも添毛手結びの形式でも実質は同様ただの手

作業 (hohe Handarbeit) と学び知った技術的作成法の性格にある。ただの手作業は、いかなる機械的経営をも、それゆえいかなる作業時間短縮をも寄せ付けず、例えばパリのゴブラン織のごとき高額の贅沢作業を話題としない限り、現代ヨーロッパの経営体制とは絶対に両立しない。だが大量生産を目指す工場なるものの優位を前にして、すでに手仕事 (Handwerk) 経営、いわゆる工芸 (Kunstgewerbe) がもはや立行けないのであれば、あらゆる経営体制のなかで最も原始的な家内仕事 (Hausfleiß) にはなおさら期待もなるまいが、今日なおオリエント絨毯の圧倒的大部分が作られているのは、この家内仕事よつてのことである。

このこととの連関でふたたび、オリエント絨毯の考察では奢侈絨毯と日用絨毯との厳しく原則的な区別を要する、とすでにしばしば強調せる事情を思返したい。回教国家の崩落により豪華絨毯の生産が今日ほとんど全くと云えるほどに杜絶えても、かつて当の生産に携わった工業の後裔として、ところどころ相変らずオリエントでは職業的絨毯づくりが保たれていて、職業ゆえ自分の必要のためにでなく他人の注文に応じて作業している。それどころか西部小アジアやスミルナ後背地では、ヨーロッパ商店の注文に応じる大量制作のヨーロッパ的経営体制すらが取入れられた。けれども集中的工場作業はオリエント人の本質と根本的に合わないので、作業は作業する人の家で、家族成員の女性の力と一体になって遂行される。したがって経済的に見れば古形の家内仕事 (Hausfleiß) だが、ただしもはや自分用にでなく、はっきりと利益を狙つての作業である。このような仕方で作られる絨毯はヨーロッパ商店の注文品であり、販売上の危険も商店が担うのであるから、この経営体制は東スイス^{リクス}フオーアアルベルク [Vorarlberg スイスと接するオーストリア最西端の州] の家内工業 (Hausindustrie) とみに平行する。

だが、みすばらしく残存する工芸的絨毯制作にしても現代的スミルナ家内工業にしても今日、オリエント絨毯づくりにとつての、あの家内仕事 (Hausfleiß) による制作のごとき重々しい意義は夢にも要求できるものでない。ただ

いまのペルシア王国三分の一強は遊牧民 (Nomade [n]) から成り、移動という生活法は (ちなみに最終的には独得の氣候・大地の条件に關すること) 定住する農耕の営みを許さないが、家畜飼育のほかになお残る十分な時間が、太古から伝わって本来ただ自分の必要のためにのみ尽す絨毯制作との取組みは叶えてくれる。またアナトリアからペルシアまでの定住農民 (sedfate bäuerliche Bevölkerung) にも、何百年以前と同じく今日なお、必要な自家用絨毯を自分で作る心得がある。言いかえると女性である農民は、少くともペルシアでは、大体のところ野良作業を免除されているので、極度に時間の要る絨毯添毛手結びに励む暇を見出せる。同じことが少くとも同程度は遊牧民女性にも当嵌り、ほとんど牧畜には關らなくてよく、また (大まかには原始的な天幕や皮製天幕 ^{キビトカ} *Yurt* をめぐっての) 家事の世話でも、自分らに最も大事な養分は羊たちが恵んでくれるが、これら羊の毛に手を加えて絨毯にする暇なし、などと言えるほどに多くを求められていないし、こうして絨毯が遊牧民の家具「動産」にして富財にもなっている。

作り手の必要や乏しい手立て相応に、いつでも大きさがまことに控え目な遊牧民小絨毯ですら、最近年では、ヨーロッパの途方もなくなったオリエント絨毯欲しやの問合せて商取引の対象となっているが、この事情は、これまでのところ当の絨毯制作の経済的性情を何ひとつ変えていない。こうした絨毯は真の家内仕事ものづくりとして、作業はただ作り手自身の必要のためにのみ行われる。それでもこのことは、あれやこれやの品が掘出物として仲買人の手に入り、こうして国際取引の道へ進むことを妨げはしない。

上述のことから十分に明かだが、平織り同様に絨毯添毛手結びが最もよく栄えるのは、ただの手作業として家内仕事の遣り方で行えるところ、言いかえると、ほかに旨く活用できない時間を当の作業に使える境遇においてこそである。ばらばらの例外を度外視すれば、このような状態がもはやヨーロッパには久しく現存せず、ましてヨーロッパの経済生活全体が力と時間をできるだけ節約しつつ利用し尽すことへと押寄せている今日では、すでに段階とし

て克服された家内仕事の蘇生は考えられない。だが同時に、なぜオリエント絨毯制作の技術を今日もはや永続的成果の見込みありとしてヨーロッパへ移植できないか、の理由もここにある。

平織り、つまりキリム（Kilim）の生産については全く除外であつて、これほど事業欲の盛んな今日ですら一度として真剣に試みられたことがない（それでも試みられたところでは、ハンガリーやスカンディナヴィアのごとく以前の平織り養成に結付けられるとしてよい）。反して、これまで見てきたが添毛手結びの方はヨーロッパ工場体制での採用努力があり、しかも主としては、作業賃金が比較的安いので極度に時間の要る人手作業が決算では、少くとも企業家に絶対的損失という結果を生まなかつた地域においてのことである。とりわけ世界的名声ある大手の織布工場では、ひとたび導入せる添毛手結び絨毯模倣を旗印ノ名譽ノタメニ（pour l'honneur du drapeau）保持しようと努めてきた。他方ではスイスにおいてのごとく現代ヨーロッパの家内工業を添毛手結びに従事させたいと試み、同じ方向でアーグラムのクルシユニャフ博士「前出 本論叢第百二十六集二四頁」が捉えた試みは、もはや古スラヴ家内仕事の概念にはないが、現代家内工業の概念には包摂できるし、こうした事情に、添毛手結びもかなりの見込みを負うているとしてよい。けれども永続的成果となれば、ヨーロッパの、いかなる機械的補助手段、それゆえいかなる作業時間短縮にも近寄れぬ絨毯添毛手結びにはほとんど予言がなるまい。

これがオリエントと西洋との今日の状態である。そして見てきた通り、後期ローマ人とルネサンス時代の人々が同じくオリエント絨毯に囲まれながら絨毯制作自体には着手しなかつたのであれば、当時すでにオリエントと西洋との経済的相違が西方文化諸国へのオリエント絨毯技術の移植を阻害した、との結論がおのずと湧きはしないか。

残念ながら経済発展（wirtschaftliche Entwicklung）の歴史は今日までなお、右の間に十分の確信を以て答えられる

ほどに研究が深まっていけない。ましてやオリエントの経済史は依然として、上述の状態を一層精確に追跡して、個々の細部における種々の相貌を確定できるようにさせる徹底的な詳細報告を全く感じさせない。それでも断然はつきりと大まかに言えることが二つある。

一方で、現代の世界へと移るヨーロッパ経済状態の形成は、蒸気機関の発明により一挙にでなく、中世から徐々に進む経営体制の発展が準備し、結果として原始的経営段階の家内仕事から絶えずますます遠く離れてきた、というものである。

他方で、オリエントでは何百年來の政治的社会的放漫経営だけがものづくり法 (Produktionsform) で家内仕事にしがみつく責を負うのでない、ということである。確かに今日オリエントでは、中世の終りに至るまでの往昔に文化の花咲き住民の犇いた広大な地域が荒地である、と認めなくてはならない。例えばメソポタミアのごとき地方の諸都市に中世ならば思わなくてはいけない高度に発展せる工業が、オスマン・トルコ「建設一二九九年ほかの諸説」支配下の回教徒社会崩落とともに次第に後退、さまざま遂に全く消滅して、代りにまたも原始的な家内仕事ものづくりが可能となった。しかしながら、オリエントは実質的にいつまでも家内仕事に止まるまま、西洋は何百年も一貫して作業分割の極限にまで迫ろうと努めている本當の根柢は、両地帯双方の、地理学的・気候学的で、この地理と気候に制約される民族誌的 (ethnographisch) な相違にある。

さきほど、この早い時代に原始的な絨毯平織りや恐らく添毛手結びさえもの知識が当地にはあったと思わざるを得なかったように、中世初期にはまだ簡単な技術での家内仕事が中央ヨーロッパ全体で支配していたらしいとしても、遅しく発展せる都市体、稠密な住民、維持に必要な地代は全く狙わない集中的土地管理、個人の人格的自由、この自由を思つて奴隷なる姿での安価な労働力の調達は無視すること——こうしたことのすべてが、抑えがたく有

無を言わず西洋では、工業の形成へと駆立てずにいなかった事情である。

ただいま挙げた、西洋に特徴的な状態は、確かにところどころオリエントでも見られるものの、しかしオリエントが実質的に示すのは全く別なる経済の図である。

「自分らの地勢ゆえに誰しも畜産にひどく頼ってきたことが小アジア諸地方の特異性である」とクレーマーは言う（Alfred von Kremer, Kulturgeschichte des Orients. II. S. 286. 本論叢第百三十一集一三頁参照）。「大体は瘠せた乾燥地帯に属し、降雨量は乏しく、それゆえ高原は耕作に適さず、利益を思えば畜産のためにしか使えない。こうして、牛は比較的疎かにされて好んで他の動物を飼育したが、羊・子羊・山羊・駱駝であり、みな豊かに毛を供給してくれ、これらの毛に所帯内で手を加えるのが最初は常であつた。だが後になると（später）オリエント大方の地方で非常に活気ある織布工業が成り、なかで多くは今日までも保たれてきた」。この「後になると」の語は文中では「並んで（daneben）」に置代えるのがよからうが、見る限りオリエントでの工業はいつでも政治的社会的躍進と平行し、衰退の時代となれば都市の工場も後退するからである。他方で家内仕事は政治的変革に動かされないまま、どころか都市工業退却の結果としては勢いを増す。

遊牧の広汎な拡張と不屈の固守をも説明できる、この気候的因子に、イスラムのオリエント独得の社会的因子が加わり、これが家内仕事ものづくりへの頑固な執着にとつて同じく最大限に重要であつたに違いない——奴隷身分（Klaverei）なる制度のことである。とりわけこの制度によつてこそ産業経営への進歩、手仕事への、工業への進歩が阻まれたのである。ふたたび権威クレーマーを引用すると「イスラム最初の時代に手仕事（Handwerk）はいく僅かだが、手仕事人「職人」階級が最も少かつたのであり、当時アラビアの家政では万事を奴隷が作業した——衣類は家政で織られ、裁たれ、縫われて、仕立ても同じく奴隷の手仕事であつた」（前掲書 II. S. 184）。もとよりアラビア

以外のオリエント諸地方での贅沢品渴望はすでに当時はるかに大きくなっていたし、華麗な身近の魅力ある刺戟が解るようになると、豊かになったアラブ人自身が、これまではキリスト教徒やユダヤ人ペルシア人の営んでいた芸手仕事をおのれの目的のために用い始めた。こうして教主統治のもとで国営工場制工業（マニファクチュア「*Manufactory*」）が成り、所産は、バグダッドのアッバス朝「七五〇―一二五八」宮廷の絢爛豪華を述べる年代記者の万感横溢の描写によって極めて有名になっている。この種の贅沢に君侯や上流人士のほか都市住民も或る程度まで与り、およそ衣服や織物の領域では、もはや家内奴隷の限られた伎倆では扱えぬ課題も多くなった。こうして都市の織布工業はしばらく盛りに達したであろう。だが並んでは、要求の小さな必需、ことに日用絨毯生産のために、いつまでも家内奴隷の活動は求められていたとしてよい。それゆえ都市住民のなかでも、このような道で奴隷身分の制度が家内仕事の維持に作用してきたであろう。

ただいま述べた状態をさらに追跡するには適切な準備作業が欠けている。それでも大まかには現在すでに、絨毯―家内仕事をオリエントでは引立て西洋では不可能にさせたのは、主として、オリエントと西洋との経済的社会的状態に今日現存し往昔にも存在した相違である、と認めなくてはなるまい。上述の事柄で幸いにもわれわれは一種の検算試料（*Rechenprobe*）を見出せる立場にあるが、しかも当の助けとなるのが例の、疑いない仕方ではヨーロッパ大地の生れと実証されてきた絨毯ものづくり（*Teppeichproduktion*）である。

その種の試料をこれまで南スラヴで、どこるか北スラヴの一族ルテニア人では平織りを、さらにスカンディナヴィア半島では平織りと添毛手結びを見てきた。より精しく調査すれば、これらの地方がオリエントと共有する特徴を認めることは難しくなろう。特に南スラヴ諸地方はいまもさまざま経済的関係でオリエントの領界に入るし、この事情は、これらの地方でイスラムがまことに永いあいだ支配を確保できながら、これらの地方を越えての支配は

もはやいつまでもとは進め得なかつた事実を説明するのに、確かに多く役立つ。すなわち南スラヴ諸地方がオリエント大方の地方と同様に際立つのは、大都市の不足によってであり、交易および工業の不足によって、さらには輸出を見出し難い農産物の過剰によって、回転資金の欠乏と住民密度の寡少によってのことなのである。

ス、カン、ディナヴィアにとつて右の事情は確かに限られた妥当性しかもないが、しかしここで明確この上なく増すのは独得の氣候状態による事情である。この氣候が一年の大部分で農業的日課を最少にまで局限、したがってそのまま挑発となつて人々に已むを得ず家内仕事を営ませたのは、ようやく極く最近、交易・交通両事情全体の変革と平行して、これまでより名のある工業設立の条件もスウェーデンおよびノルウェーに創出されるに至る、までのことであつた。

ところで南スラヴ諸地方とオリエントとの經濟的狀態における類似（Analogie 三四頁参照）が過去については貫徹できるとなれば、同じ類似は未來についても用いることが許されるであらう。眞のオリエント絨毯を思ふ愛好家にとっては無論その種の未來展望などすこしも悦ばしくあるまい。というのも到るところヨーロッパでは、絨毯添毛手結びと絨毯平織りが家内仕事の道で十年足らずの昔まで保たれていた場所で、現在ほとんど完全に死に絶えているからである。このことで南方でも北方でも設けられた人為的な蘇生の試みは、この絨毯づくり機械的運轉手段を導入して作業時間の短縮に成功するには、あまりにも永く都合な基盤を欠いている。ここで、古い技術で生れた表面の性質にあくまで拘りたいと、これまで同じ方向で取られた試みの空しさを顧み、総じて蘇生のが疑わしくなると、ようやく問が出る——ただの手仕事を止めても当の絨毯独得の魅力は、消えはしないのでなかろうか。

さてオリエントに最も近縁の南東ヨーロッパの諸地方が西ヨーロッパの經營体制に開かれて古い家内仕事を止め

ざるを得ないとすれば、同じことがオリエント自体をも脅かす。さよう、さきほどこでに触れたことだが、増大するヨーロッパの影響の結果として、オリエント絨毯制作で拡がる解体過程は年ごとに増しているし、ともどもに進むのが回教的な国家形体および社会形体の解消である。太古のオリエント絨毯制作の魅力ある刺戟を少くとも模様(Muster)と色彩(Farbe)で遠い未来に保持するための唯一の可能性は、これら双方を現代のヨーロッパの絨毯機織り(Weberei)へと賢明に移すことにある。このような移転の成功は今日なお、もとより決して保証されていないと思える。だがこの方向での努力が全然見込み無しではないことを、ごく最近「ウィーン工芸学校」(Wiener Kunstgewerbeschule「オーストリア博物館」附属)内シュトルク工房(Storck'sches Atelier)から出た品々、あるいはハース父子商会(Firma Haas & Söhne)で仕上げられた品々など、この種で極めて注目に値する試みが示している。それゆえ絨毯の壮観の愛好家は、こうした努力が満足できる決着を見出すと期待して宜しい——いつの日か、最後の中央アジア遊牧民には最後の絨毯豎形手織機が墓に納められるであろう、その瞬間に、である。

「オリエント古絨毯 完」

目次

まえがき

序論

絨毯の概念

目的規定による絨毯の分類（壁掛け絨毯 敷物絨毯 家具覆い絨毯）

絨毯それぞれの部類に応じる技術—これら技術のオリエントにおける忠実な伝承

第一章 平織り絨毯

平織りやゴブラン織技術の性格—きわめて高齢の技術

平織り絨毯の、作成技術による結果としての装飾文様法

今日の自然民族、古代エジプト人、インカ・ペルー人における平織り

古代平織りの出土品（南ロシア エジプト）

オリエント平織りの、ヨーロッパのゴブラン織工場生産との関係

tapisseries sarazinois（サラセンの絨毯の作り手）

今日のオリエント・キリム

原始的平織りの家内仕事との関係

ヨーロッパの絨毯平織り（セルビア ブコヴィナ ノルウェー）

第二章 添毛手結び絨毯

A 技術的なこと

床張り用という添毛手結び絨毯の規定

添毛手結び技術の性格

原材料

B 歴史的なこと

古エジプト添毛手結び絨毯一枚についてのバードウッドの誤れる報告

中世末期の最古オリエント添毛手結び絨毯

豪華絨毯と家内仕事絨毯

幾何学的模様か植物的模様かと別ける添毛手結び絨毯二分法

——これにもとづくアーリア・モンゴル理論の不確実なること

トルコ絨毯・ペルシア絨毯・遊牧民絨毯に別ける分類

トルコ絨毯（スミルナ絨毯もしくは小アジア絨毯）

トルコ絨毯の技術および装飾文様の性格

十五世紀十六世紀におけるトルコ絨毯の先発例（レッシング著『古オリエント絨毯模様』）

遊牧民絨毯

狭い意味におけるペルシア絨毯

草花装飾文様法 人間像 動物像 狩猟場面

中国の影響

地方君侯所属工場の豪華絨毯

第三章 スサン「ト」シルト

グラーフ購入スサン「ト」シルト絨毯のカラバツェクによる記述

金糸銀糸の使用と、ここに生れる別格の添毛手結び

スサン「ト」シルト絨毯の装飾文様の内容

場所規定と年代規定

中国寄りトルキスタンから出た比較的近年製絨毯との比較

第四章 古オリエント芸術との関係における添毛手結び絨毯

オリエント絨毯装飾文様法を語る従来の説明

ヘレニズム・ローマの古代を顧慮しないゆえに説明が不十分であること

ササン朝ペルシアを思う仮説

パルティアのアルサケス朝時代の芸術遺例

ササン朝時代の芸術遺例（クテシフォン 摩崖浮彫）

ササン朝の工芸―銀器 絹織物。これらと後期ローマ工芸およびエジプト工芸との比較

オリエント絨毯における平面装飾の歴史的発展に見える種々の体系

縁取り意匠^{モティーフ}が入り込んで平面を充填すること

ササン朝の平面装飾（マシタ宮殿 タージ・ボスタン ラバト・アマン）

平面装飾用の樹木意匠^{モティーフ}と狩猟場面

中世・近世におけるペルシア芸術―彩釉タイルによる壁面化粧張り

サラセンを思う仮説

サラセン最古の芸術遺例に織布模様が欠けていること

後期古代に由来する植物的要素（イブン・トゥールーン）と幾何学的要素

カイロのスルタン・カラウンの病院マリスタンの木製浮彫

サラセンの文字装飾法

中世の東方曙国^{オリエント}著作作家に見られる古オリエント絨毯の記述

第五章 西洋における添毛手結び絨毯

サラセンのオリエントには依拠せぬヨーロッパの絨毯添毛手結び育成は実証できるか否かの調査（バルカン諸地方

スウェーデン ノルウェー）

オリエント豪華絨毯のヨーロッパにおける模倣は実証できるか否かの調査（イタリア スペイン ポーランド）

西洋におけるオリエント絨毯制作が一度として確たる地歩を占めることのできなかった原因の探究

文献案内 ウルリーケ・ベツシユ